

地中海古代都市の研究 (115)

メッセネのアスクレピオス神域のセバステイオンについて

9. 建築歴史・意匠 - 4. 西洋建築史

ギリシア メッセネ セバステイオン 平面 食事

1. はじめに

熊本大学の古代ギリシア調査隊は、2001年と2003年の夏にかけてメッセネのアスクレピオス神域のセバステイオン遺構の実測調査を行い、現状図(図3)を作成した。セバステイオン遺構は、ほぼその大部分が床レベルもしくは、壁下部までしか残っておらず、その平面のみ知ることができる。本稿では、セバステイオン遺構の現状を報告し、現状図と調査資料をもとに、平面的考察を行ない、平面の復元を試みることを目的とする。¹⁾

2. セバステイオンの概要

セバステイオンは、アスクレピオス神域の北側に位置し、さらに、その北側にはアゴラが広がる。セバステイオンは、東西に長い矩形のプランを持ち、その中央を幅およそ7.11mの階段付き北プロピロンによって、東西に分けられている。セバステイオンの南側は北ストアの後壁によって支えられている。

セバステイオンは、カエサレイオンとも呼ばれ、ローマ時代に、アウグストゥス帝とローマを崇拝する場所として、使われていた。それ以前は、都市の施政者により催された、女神メッセネとアスクレピオス神を称える祭礼の際に、公式な食事をする場所として使われていた。²⁾

3. セバステイオン各部の現状

3-1 全体概要

セバステイオンは北プロピロンを挟んで、東西に外法でおよそ62.65m、南北に内法でおよそ9.44mの矩形からなる。東西翼部は、ほぼシンメトリーなプランで互いに独立している。両翼部とも、北ストアに繋がる階段を持つ。

正会員 ○西村確³⁾ 伊藤重剛¹⁾ 林田義伸²⁾ 吉武隆一³⁾

東西両翼部は、5つの部屋から構成され、ここでは、便宜上、図3のようにA室、B室、C室、D室、E室と名付ける。セバステイオンの床レベルは、南北方向に、西翼部のE室を通る断面で切ると、北ストアの後壁のトイコベートからおおよそ3.0mの高さである。外壁は、切石積みで、内側の壁は野石積みである。外壁の厚さは、北側で、およそ0.67m、南側でおよそ0.71m、東側でおよそ0.66m、西側でおよそ0.89mである。外壁のうち、北側の壁は、他の壁と石積みが異なり、西方向に長い部材と南北方向に長い部材を交互に組み合わせてつくられている。これは、北側の壁のみに見られる特徴である。また、南側の壁厚が、北側の壁に比べ、厚いのは、セバステイオンを支えている北ストアの後壁が、そのまま立ち上がっているためであると考えられる。

3-2 東翼部

1) 全体概要

東翼部は、東西に外法でおよそ27.76m、南北に内法で9.44mの矩形からなる。各部屋の大きさは、内法でおよそ以下のようなになる。

部屋名	東西方向の長さ×南北方向の長さ
A室	6.21m×4.86m
B室	6.21m×3.95m
C室	4.46m×9.44m
D室	4.43m×9.44m
E室	9.63m×9.44m

A室には、北東隅に井戸と思われる穴がある。穴の直径はおおよそ0.9mである。B室には、東側の壁から西側に向かって、およそ3.5mの位置に、壁の基礎がある。これは、現状図には記載されていない。この壁の基礎の長さは、およ

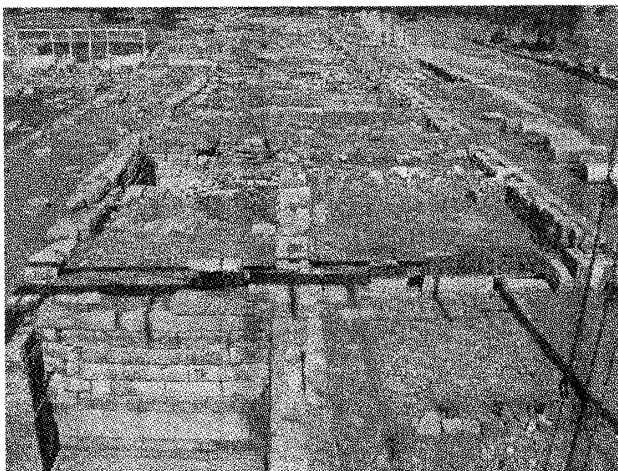


図1 セバステイオン東翼部

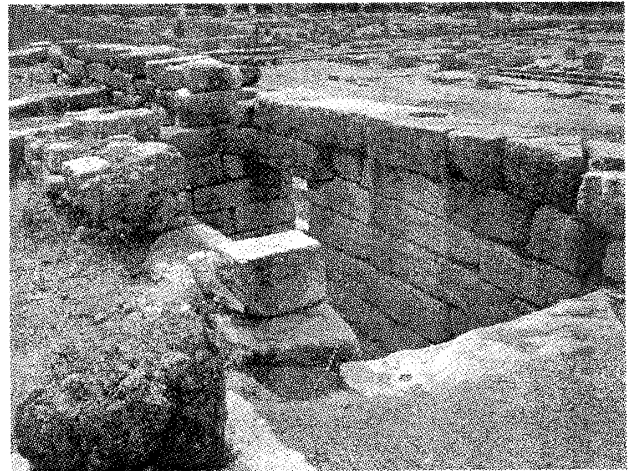


図2 北ストアへの西翼部階段を見る

A Study of Ancient Cities of Mediterranean(115)On plan of Sevasteion of Asklepieion at Ancient Messene

NISHIMURATsuyoshi, ITO Juko, HAYASHIDA Yoshinobu, YOSHITAKE Ryuichi

そ東西方向に1.2m、南北方向に1.1mである。A室、B室の西側の壁は、比較的大きさの小さい石組からできている。そのため、この壁は後で積まれたものと考えられる。C室とD室には、両方の部屋をまたぐ形で、コの字型の壁がある。コの字型の壁の大きさは内法でおよそ0.37m×0.52mである。E室は、東翼部で最も大きい部屋で、北プロピロンに接する。

2) 入り口

敷居部材が残っているのは、北ストアとC室の南側の階段室、D室とE室の間の2箇所である。扉は2箇所とも両開きと考えられ、それぞれセバステイオンから北ストア、E室からD室に向かって内開きである。東翼部への出入口は、C室の北側とC室の南側の階段室に、あったと考えられる。C室の北側には、敷居部材が残っていないが、石の積み方の様子から出入り口であると判断できる。A室の南側の壁に、入口の跡がある。敷居部材は残っていないが、B室への入口であったと考えられる。入口の幅は内法でおよそ0.79mである。

3) 階段

C室の南側に北ストアに繋がる階段がある。この階段の段数は、11段、蹴上げは、2段目から10段目の平均値でおよそ0.23m、踏面は、3段目から10段目の平均値でおよそ0.26mである。北ストアの後壁はストア側に少し傾いているため、階段にも歪みが見られる。

4) バットレス

矩形の石積みが見られ、A室、C室、E室の北側の3箇所に見られる。これらは、バットレスと考えられる。

3-3 西翼部

1) 全体概要

西翼部は東西に外法でおよそ27.76m、南北に内法で9.44mの矩形からなる。各室の大きさは、内法でおよそ以下ようになる。

部屋名	東西方向の長さ×南北方向の長さ
A室	6.14m×4.84m
B室	4.06m×3.53m
C室	4.52m×9.44m+2.58m×4.06m
D室	4.41m×9.44m
E室	9.32m×9.44m

西翼部は東翼部に比べ、A室、B室、D室、E室で目立った特徴が見当たらない。C室においては、ほぼ中央と階段のそばに矩形の部材が見られる。前者は、大きさがおよそ0.9m×0.5mで、0.1m×0.1mの矩形の穴を持つ。後者の大きさは、およそ0.86m×0.72mである。

2) 入り口

敷居部材が残っているのは、C室の北側、C室とA室の間、C室とD室の間、D室とE室の間、C室の南側の階段室の計5箇所である。扉は、全て両開きと考えられる。それぞれの扉は、C室からアゴラ側、A室からC室、D室からC室、E室からD室、C室の階段室から北ストアに向かって内開きである。西翼部への出入口は、C室の北側とC室の

南側の階段室の2箇所である。また、B室の東側の壁はおよそ0.8mほど隙間があり、ここにも入口があったと推測される。

3) 階段

C室の南側には北ストアに繋がる階段がある。階段は、段数が13段、階段幅1.35m、蹴上げが2段目から12段目までの平均値でおよそ0.20m、踏面が3段目から12段目の平均値で、およそ0.27mである。

4) バットレス

矩形の石積みが見られ、E室の北側の壁に1箇所見られる。これは、西翼部の矩形の石積みと同様に、バットレスと考えられる。

3-4 北プロピロン

北プロピロンは、東西方向におよそ7.11mで、北ストアとアゴラを繋いでいる。北ストア側に、2本のコリント式円柱を持ち、階段がついている。階段は1段目から11段目まで残っており、階段幅はおよそ7.11m、蹴上げは、およそ0.18m、踏面はおよそ0.31mである。階段は、もともと17段あったと推測される。ほぼ中央に、敷居部材が、東西方向にほぼ3つ連続して並んで残っている。敷居部材は、左右のものに比べ、真ん中のものが東西方向に長い。扉は全て両開きで、北ストアからアゴラに向かって内開きであったと考えられる。セバステイオンの北側の壁と同じライン上に、左右の敷居部材の前を塞ぐ壁がある。この壁は、本来必要がないと考えられるので、セバステイオンの北側にストアをつくる時に、ストアに合わせ作られたと考えられる。

4. 比較・検討

1) 東西翼部の大きさの比較・検討

東翼部と西翼部の大きさを比較すると、東翼部と西翼部の東西方向の外法寸法はほぼ同じであり、両翼部は、同じ設計寸法で計画されたと考えられる。

東西翼部の各部屋の大きさを比較すると、A室では、部屋の大きさは、ほぼ同じである。B室では、南北方向の長さは、ほぼ同じである。C室では、A室とD室に挟まれている部分の東西方向の長さはほぼ同じである。D室では、部屋の大きさは、ほぼ同じである。E室に関しては、東西方向の長さに東翼部と西翼部でおよそ0.3mの差が見られる。これらのことから、E室において差は見られるものの、各部屋に関しても、翼部の外形同様、設計寸法は同じであったと推測される。

2) 各部屋ごとの比較・検討

A室

前述したように、東翼部には、井戸と思われる穴が部屋の北東隅にある。これは西翼部にはない。また、東翼部において、部屋の西側の壁は、比較的大きさの小さい石からなるので、後に作られた可能性が高いと考えられる。今後、現状の壁の下から、当初の壁基礎と敷居部材が出てく

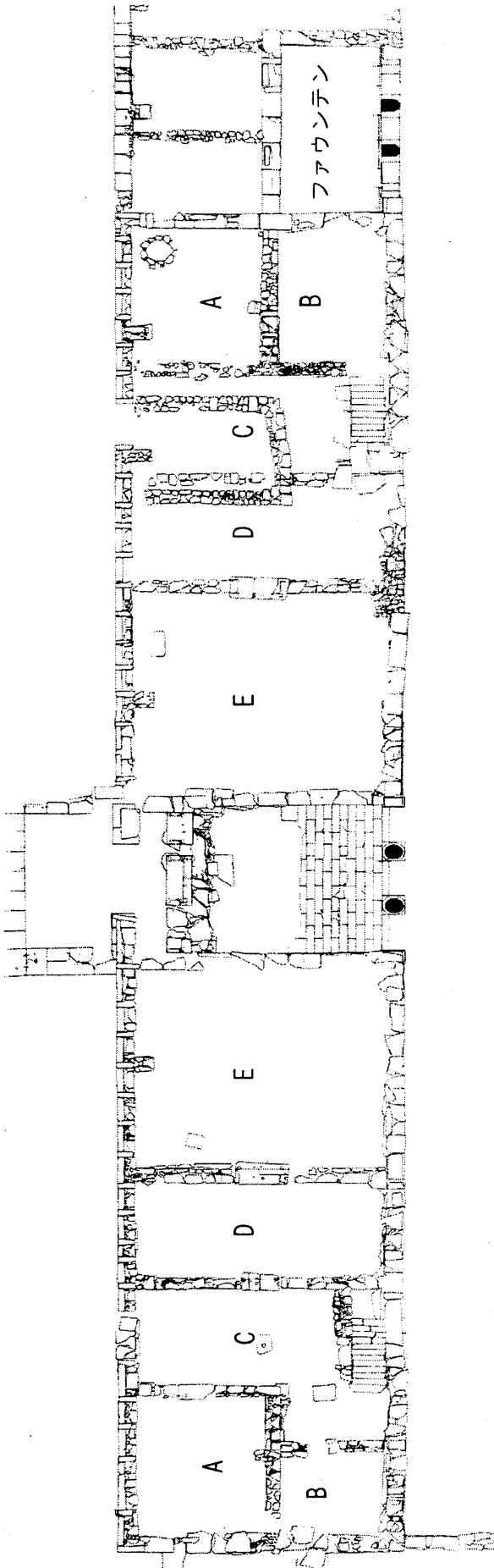


図3 セバステイオン現状平面図

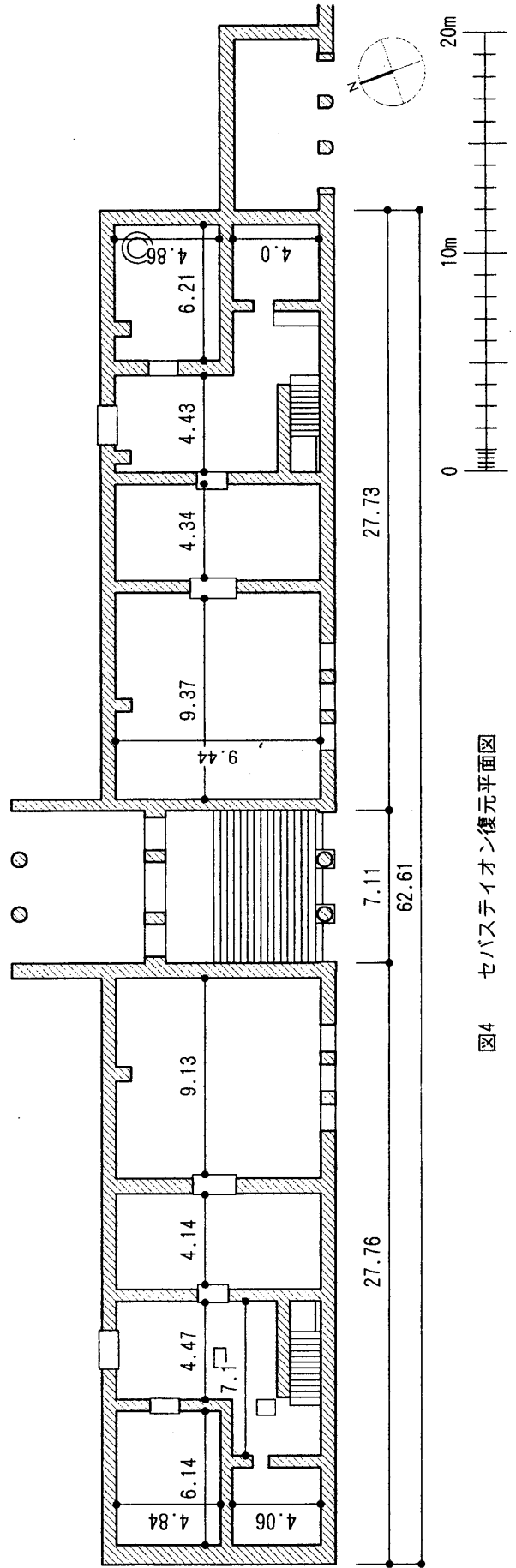


図4 セバステイオン復元平面図

る可能性があるが、現状では不明である。そして、部屋の南側にあるB室への入口は、当初からあったものかどうかは不明であるが、現在、A室において入口の跡が確認できるのは、ここだけである。復元案では、この入口の跡は幅が狭いので、平面はシンメトリーであると考え、A室の扉は、西翼部と同じくC室との間にあるとした。

B室

東翼部において、B室とC室の間の壁は、ちょうどA室の西側の壁と同じ直線上にあり、西翼部のB室の東側の壁と位置が異なる。この部屋の西側の壁も、A室の西側の壁と同様、比較的大きさの小さい石から成るので、後の時代に作られた可能性が高い。この壁については、もともとこの位置になかったことが考えられる。当初のB室とC室の間の壁は、東側の壁から内法でおよそ3.5mの位置の壁基礎の上に、あったと推測される。また、西翼部において、入口は確認できるものの敷居部材はない。

C室

東翼部において、C室とD室の間の壁をまたぐコの字型の壁は、比較的大きさの小さい石からなるので、後の改築により作られたものと推測される。このことから、当初は、C室とD室の間に敷居部材があったことが考えられる。西翼部において、部屋の中央に、矩形の穴のあいた部材、階段のそばに矩形の部材が、それぞれ見られる。この2つの部材がどういう用途で使われていたかはわからないが、東翼部では、同じ部材は見られない。東西翼部の階段は、共にC室の南側に位置する。東翼部と西翼部で、踏面はほぼ同じであるが、段数と蹴上げが異なる。

D室

東翼部、西翼部とも、E室への扉の位置は同じである。

E室

セバステイオン内で、敷居部材が最も大きいのは、この部屋である。敷居の大きさは、格式を表していると考えられるので、セバステイオン内で最も格式の高い部屋はE室であると推測される。

扉

東西翼部とも、セバステイオンへの出入り口は、アゴラ側と北ストア側の2箇所ある。扉は、セバステイオンの内側からセバステイオンの外側に向かって内開きである。セバステイオン内の扉の開き方は、A室からC室、D室からC室、E室からD室に向かって内開きである。

バットレス

バットレスは、東翼部と西翼部で、それぞれ3箇所、1箇所である。E室のバットレスは、北プロピュロンを軸としてほぼ左右対称の位置に配置されている。しかし、残りのバットレスに関して、位置をどのように決めたかは不明である。また、バットレスの中には北側の壁と一体となって

つくられたものもある。

3) 部屋の用途の検討

本来、セバステイオンは、公式な食事をするための場所である。食事をとる主室は、セバステイオン内で、最も広く、格式のある部屋であったと考えられ、E室が、主室にあてはまると推測される。また、D室はE室へ入る前にあるので、主室の前の前室として考えられる。A室、B室はセバステイオンのサービス部分と思われる。東翼部のA室には井戸と思われる穴が見られるのでA室が台所であると思われる。B室は、用途が明確に分らないが、貯蔵庫のようなものであったと思われる。C室は扉の開き方から、玄関ホールであったと考えられる。

5. まとめ

これらのことを下に、今回セバステイオン平面の復元案(図4)を考えると以下とおりになる。³⁾

- ・セバステイオンの平面は基本的にシンメトリーで計画された。しかし、東と西の主室においては最大およそ30cmの誤差があった。
- ・扉は上の2箇所の出入口とA室とC室の間、C室とD室の間、D室とE室の間にあった。B室とC室の間に扉はなかった。
- ・バットレスの位置と数は現状通りであった。
- ・C室とD室をまたぐコの字型の壁は、もともとなかった。
- ・東翼部のA室とB室の間の入口は、後でつくられたものである。
- ・東翼部のB室の西側の壁は現状の位置より、東側にあった。
- ・北プロピュロンの左右の敷居の前にもともと壁はなかったがのちに壁がつくられた。

セバステイオンはローマ時代に、食事をする場から皇帝崇拝の場として使われ方が変わる。セバステイオンに見られる変化は、これと関係があると考えられる。この変化は東翼部においてははっきりと現われるが、特にA室、B室、C室で顕著に見られる。このことから、時間が経つに従い、東西翼部のシンメトリー性が崩れていき、東西翼部の性格の異なるものになっていったことが想像される。セバステイオンは、窓の位置、屋根のかかり方、ファウンテン北側の2つの部屋と関係性など、不明な点が多い。これらは、今後の研究の待たれるところである。

注

- 1) アスクレピオス神域は1950-1970年代にオランダスにより調査され、一応の復元平面図は描かれているが、今回再調査して、あらためて平面を検討した。
- 2) P.G.Themelis, Ancient Messene-Site and Monuments, Athens, 1998, p16, p33
- 3) 復元根拠の得られないところはオランダスの図面を参考とした。

1) 熊本大学助教授 工博

2) 都城工業高等専門学校教授 博(工)

3) 熊本大学大学院自然科学研究科

Assoc. Prof., Kumamoto University, Dr. Eng.

Prof., Miyakonojo National College of Technology, Dr. Eng.
Graduate School of Science and Technology, Kumamoto University